

第14回白壁賞は浜田勉氏らが、第33回村上記念「胃と腸」賞は八尾隆史氏らが受賞

2008年9月17日(水)、笹川記念会館国際会議場で行われた早期胃癌研究会の席上、第14回白壁賞と第33回村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。第14回白壁賞は浜田勉・他「Crohn病における食道病変」(胃と腸42:403-416, 2007)に、第33回村上記念「胃と腸」賞は八尾隆史・他「非ステロイド系抗炎症剤(NSAID)起因性腸病変の臨床病理学的特徴と病態」(胃と腸42:1691-1700, 2007)に贈られた。

第14回白壁賞

研究会司会の清水誠治氏(大阪鉄道病院消化器内科)から、まず第14回白壁賞受賞者代表として浜田勉氏(社会保険中央総合病院内科、現:東京都保健医療公社東部地域病院内科)が紹介された。本賞は、故白壁彦夫氏の業績を讃えて、消化管の形態・診断学の進歩と普及に寄与した論文に贈られるもので、「胃と腸」に掲載された論文に加え、応募論文も選考の対象となる。今回は応募論文1編と「胃と腸」42巻に掲載された全論文が選考対象となった。

選考小委員会を代表して平田一郎氏(藤田保健衛生大学消化器内科)は、本賞は選考小委員会で慎重に候補論文を絞った後に全編集委員の投票により決定したもので、学術性・論文の形式・画像の質・社会への貢献度・国際性・今後の発展性・倫理性などを選考基準としていると説明し、本論文について“Crohn病における食道病変23例を対象に、美しい画像、特にきれいなX線写真とともにその臨床像を解析した論文である。それほど多くないCrohn病食道病変の実態を明らかにし、その診断に寄与する論文として評価された”と選考理由を述べた。

「胃と腸」編集委員長の芳野純治氏(藤田保健衛生大学第二教育病院内科)は“Crohn病の食道病変は発表されるのは1例など数例の少ない症例がほとんどである。浜田先生はたくさんの症例を使いその画像を解析し、新しい解釈を加えている。提示された内視鏡像、X線像も本当に素晴らしい”と述べ、賞状と楯を贈呈した。医学書院金原優社長からは、賞金50万円が贈呈された。

受賞者代表として、浜田氏は“私が医局に入ったときの教授が白壁先生でしたが、先生のお名前のついた賞を



▲祝辞を述べる芳野純治氏。



▲選考経過を述べる平田一郎氏。

いただき、先生が生きておられたら喜んでもらえたと思う。そういう賞をいただき、ありがとうございます。私は早期胃癌研究会に参加して自分の臨床を磨けたと感じており、ご参集の皆様にもそういう気持ちで続けていただきたいと思うが、若いころに白壁先生にご指導いただいた、論文を書くうえでの2つの注意を披露したい。‘症例の選定に注意しなさい。多いことがよいことではない。間違いのない症例だけを選ぶかが大事である。まがいものを入れると結論を間違える可能性がある。絶対に間違いのないものだけを選んで結論を導けば、言ったことに少なくとも間違いはない’ということと、‘先人の研究した文献を丹念に読み、先人の言ったことを尊重し、それを踏まえて考察を書きなさい’ということである。本日は誠にありがとうございました”と挨拶した。

第33回村上記念「胃と腸」賞

引き続き、第33回村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。本賞は、故村上忠重氏の業績を讃え、消化器、特に消化管疾患の病態解明に寄与した論文に贈られるもので、「胃と腸」42巻に掲載された全論文の中から選ばれた。

清水氏から受賞者代表の八尾隆史氏(九州大学大学院医学研究院形態機能病理学、現:順天堂大学医学部人体病理病態学)が紹介された後、選考小委員代表の平田氏から、白壁賞と同様の手順で慎重な選考が行われたことが報告された。平田氏は本論文に関して“32例のNSAID起因性腸病変を組織学的特徴により分類し、それをもとに病変発生機序とその病態を類推したもので、今後ますます増加するNSAID起因性消化管病変の診断治療や予防につながる基礎的研究として評価された”と選考理由を述べた。

芳野氏は“NSAID起因性の腸病変を組織像から病態を解明し、重症化、潰瘍化についての要因を病理学的な立場から検討された、臨床所見と病理所見を合致させて行われた素晴らしい研究”と述べ、賞状と楯を贈呈し



▲第14回白壁賞を受賞した浜田勉氏.



▲第33回村上記念「胃と腸」賞を受賞した八尾隆史氏.



▲芳野氏(右)から浜田氏に賞状が贈られた.



▲芳野氏(右)から八尾氏に賞状が贈られた.

た。金原社長からは賞金 50 万円が贈られた。

受賞者を代表して八尾氏は“本論文は、これまで病理学的検索が不十分であった NSAID 腸炎の貴重な症例を集積することができた九州大学病態機能内科学およびその関連施設の臨床力のすばらしさの反映であり、それに病理学的解析を加えたという臨床と病理の総合力の結果である。長年にわたり臨床とともに病理学を続けてきた産物と思う。その基本は、この早期胃癌研究会に代表されるように、症例 1 例 1 例を丹念に検索することの集積だと思う。これまでご指導いただいた岩下明徳先生(福

岡大学筑紫病院病理部)、八尾恒良先生(佐田病院消化器内科)、飯田三雄先生(九州大学病態機能内科学)、恒吉正澄先生(九州大学形態機能病理)にお礼申し上げたい。私は今年 2 月から、白壁先生の在籍された伝統ある順天堂大学に赴任したが、今後も 1 例 1 例を大切に臨床とともに精進したい。本日は誠にありがとうございました”と挨拶した。

両賞の受賞者に満員の会場から拍手が送られ、引き続き受賞者による受賞論文の概要の講演が行われた。